



芭蕉の発句「いざよひのいづれか今朝に残る菊」における「十日菊」考

黄, 佳慧

(Citation)

國文論叢, 45:1-12

(Issue Date)

2012-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011643>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011643>



芭蕉の発句「いざよひのいづれか今朝に残る菊」 における「十日菊」考

黄 佳 慧

一 はじめに

貞享五（一六八八）年の九月九日に、芭蕉を含めた一座の人々は素堂亭で重陽の宴会を開催した。この重陽宴は翌日の十日になっても続いているため、芭蕉は「十日菊」を題として詞書を記し、一座の人々はその題にしたがって俳諧を興行した。当座で、芭蕉は先に立って、「いざよひのいづれか今朝に残る菊」という一句を詠んだ。先行研究はその句について、「六日の菖蒲、十日の菊」という時期遅れのを表わす喩えによって、題「十日菊」を把握し、この発句を解釈した。

ところで、当座に参加し、一句を詠じた其角はその後に著した『花摘』¹⁾で、芭蕉のこの発句を引用している。該書で其角は芭蕉の「いざよひの」の句と唐末の詩人・鄭谷の漢詩「十日菊」とを結びつけて詞書を記しており、この点から鄭谷の「十日菊」詩が、「いざよひの」の句に影響を与えたということはすでに指摘されている。「十日菊」の詩題とされた鄭谷の「十日菊」詩とは次のようなものである（テキストの細かな検討は後述する）。

節去蜂愁蝶不知 曉庭還繞折殘枝
自緣今日人心別 未必秋香一夜衰

しかしながら、其角の詞書を句の解釈にまで踏み込んで取り入れるという試みは未だ行われていない。そこで、本稿は其角の『花摘』における記述をいまいちど吟味することで、芭蕉の発句と鄭谷の詩との密接な関係を追究していく。考察の手順として、まず題「十日菊」の和歌や俳諧における由来、捉え方、さらに表現の仕方を追っていく。次に、其角は『花摘』において、芭蕉の発句と鄭谷の漢詩をどのように結びつけているか、もしくはどのように理解しているのかを検討する。そして、其角の認識を糸口にし、鄭谷の漢詩を通して、題「十日菊」の意味を見出す。最後に、芭蕉の詞書と照応する上で、其角の把握した「十日菊」をこの発句の解釈に取り入れ、解説することを試みる。以上の考察によって、改めて「いざよひの」の句を解釈し直してみたい。

二 題「十日菊」について

前節において提示したように、「いざよひのいづれか今朝に残

る菊」は、芭蕉の貞享五（一六八八）年秋の作である。^③その後、各務支考をはじめとする弟子たちが、この発句を『笈日記』^④に収録し、元禄八（一六九五）年に刊行した。当座は芭蕉を含めた一座の連衆が、それぞれ「十日菊」という題に従い、一句ずつ詠んでいった俳諧である。『笈日記』に収められた本文は次の通りである。「一」で補った内容は黄による。

①素堂亭

②十日菊「以下、芭蕉文」

③蓮池の主翁、又菊をあいす。きのふは④竜山の宴をひらき、けふはその酒のあまりをすゝめて、狂吟のたはぶれとなす。なを思ふ、⑤明年誰かすこやかならん事を

「以下、諸家発句」

いざよひのいづれか今朝に残る菊

残菊はまことの菊の終りかな

咲事もさのみいそがじ宿の菊

昨日より朝露ふかし菊晶

かくれ家やよめなの中に残る菊

此客を十日の菊の亭主あり

⑥さか折のにるはりの菊とうたハばや

「以下、素堂文」

⑦「よには九の夜、日は十日」といへる事をふるき連歌師のつたへしを、此あした、しみを払ひて申侍る。⑧また中比、恋になくさむ老のはかなさ、むかしせし思ひを小夜の枕にて、我、此心をつねにあはれぶ。今なを思ひいづるま、に、

⑨はなれじと昨日の菊を枕かな

同

一読して明らかかなように、素堂亭（傍線部①）で一座の人々が題「十日菊」にしたがって俳諧を詠むため、十日菊や亭主の素堂を中心に表現しているのは、自明のことである。さて、「十日菊」（傍線部②）という題は如何なるものであるか。近世初期の俳書を参照すると、「十日菊」が「残菊」という項目に収められ、たとえば次のように解説されている。

・「残菊」秋や九月十日より残菊乃心なり（応其著『無言抄』^⑤）

天文六（一五三七）年〜慶長十三（一六〇八）年成。

・「残菊」十日、菊の枯るに色・花を結びても、秋なり（北村季吟著『増山井』寛永元（一六二四）年〜宝永（一七〇五）年成）。

右記のように、「十日菊」とは重陽の節句（九月九日）の翌日（十日）に残った菊であり、「残菊」の項目に属する用語であった。しかし、近世前期の俳書を調査した結果、「十日菊」の由来に関する説明は見出せない。また、「残菊」や「十日菊」を用いた俳諧は、集英社『日本古典俳文学大系』に収められた俳書を調査すると、「残菊」が五例、「十日菊」が一例あり、近世初期の用例が多くないということが分かる。次に、『無言抄』や『増山井』の記述にしたがって、「十日菊」を収める「残菊」が、俳諧においてどのような題として把握されてきたのかを検討することとする。近世初期の俳書の松永貞徳著『御傘』^⑧を参照すると、「残菊」は俳諧では秋の表現であるが、歌題では冬として捉えたと解説している。この『御傘』の記述を手掛かりとし、歌題の「残菊」の由来をさらに追究すると、歌題としての「残菊」が「詩題」に基づ

いている可能性がある、という佐藤信一氏の指摘に辿り着く。⁹⁾

したがって、和歌や俳諧においては、題として「十日菊」を用いる先例、あるいは近世初期の俳諧における用例は少ないのである。そして、「残菊」について見れば、和歌においては冬の歌題として捉えられ、歌題の「残菊」は詩題に拠った可能性があるとすることが分かる。ゆえに、芭蕉が「十日菊」を題とし、「残菊」によって発句を詠んだことは、当時において珍しく、漢詩より題材をとった可能性があると推察できる。

では、当時としては珍しい題である「十日菊」を、芭蕉はどのように捉えたのか。発句の前における詞書から見ることにする。冒頭における「蓮池の主翁」(傍線部③)とは、言うまでもなく「素堂亭」(傍線部①)の亭主である山口素堂のことである。その後綴った「竜山の宴」(傍線部④)とは何か。赤羽学氏の「十日菊と十三夜」¹⁰⁾を参照すると、次のようなことが分かる。

「十日菊」冒頭の芭蕉文に「きのふは竜山の宴をひらき」云々とあるのは、九月九日に竜山で酒宴を催した「孟嘉落帽」(または「竜山落帽」とも)の故事を指しており、直接には杜甫の「九日藍田崔氏莊」の詩の一句を踏まえての表現であった。

右記のように、「竜山の宴」は杜甫が漢詩で詠んだ詩を、芭蕉が再び踏まえたということであり、詞書において芭蕉が漢詩の影響を受けていることが確認される。なおかつ、この詞書において、芭蕉が杜甫の漢詩「九日藍田崔氏莊」を踏まえたのは、もう一箇所がある。それは詞書の最後の一文「明年誰かすやかならん事を」(傍線部⑤)の部分である。この一文が杜甫の詩句

「メイネンフクワクシノシタキスコカナラン明年此会知誰健」を踏まえたことは、月院杜何丸『芭蕉翁句解参考』(文政十一(一八二八)年刊)をはじめ、つとに指摘されているところである。

杜甫の詩、明年此会知誰健。かねていふ通り小町業平の問答歌の奪胎換骨なり。世上唯換骨とのみいふは片言なり。詩にもせよ歌にもせよ、古人の胎を奪て骨を換るの法なればまた模写変態とは大に相違せり。

傍線部のように、芭蕉が発句を詠むに際し、杜甫の詩を踏まえつつ、新みを加える手法(奪胎換骨)によって小町業平の問答歌という形式を借用したという指摘である。月院杜何丸以後の注釈者は、「いざよひの」の句が小町業平の問答歌という形式によって表現されたかどうかを特に論じていない。しかし、詞書「明年誰かすやかならん事を」が杜甫の「九日藍田崔氏莊」詩を踏まえ、その詞書が発句と密接な関係がある、という言説は肯定的に継承されている。芭蕉の詞書が重陽の宴会を歌った杜甫の「九日藍田崔氏莊」詩を踏まえた上でなされていることを検討すると、題の「十日菊」も詩題によるという可能性を、さらに重要視すべきではないかと察知される。

「十日菊」を詩題とした漢詩といえは、『和漢朗詠集』に収録された元稹の「十日菊」詩が想起される。芭蕉が元稹の「十日菊」¹¹⁾「不_レ是_レ花_ニ中_ニ偏_ニ愛_ハ菊_ヲ、此_レ花_ニ開_レ後_ニ更_ニ無_ク花_ヲ」を踏まえて、「菊の後大根の外更になし」(陸奥衛)元祿年間(二六八八―一七〇二)刊¹²⁾という発句を詠んだことは、すでに先行研究において判然としている。しかし、従来の研究は元稹の「十日菊」の詩意によって、発句「いざよひのいつれか今朝に残る菊」を解釈し

ていない。それのみか、芭蕉の用いた「十日菊」は漢詩文と異なる文脈で理解されてきている。たとえば、現代の注釈書である井本農一氏・堀信夫氏編注の『松尾芭蕉集①全発句』においては、題の「十日菊」を含めて次のような解釈を行っている。

「六日の菖蒲・十日の菊」など、口さがない人は言いくさすが、十六夜の月にしても、十日の菊にしても、盛りをわずかに過ぎただけ、そのわずかに兆した影こそ甲乙つけがたい両者の魅力というものである。重陽の節句に十分歎を尽したにもかかわらず、翌十日も続けて小宴を張ろうという素堂の好意に感謝し、興する心をもって報いている。両者の風情の優劣など、本当のところどうでもいいことであろう。

右文から分かるように、現代の注釈は題の「十日菊」を「六日の菖蒲・十日の菊」という時期が遅れたことをいう喩えを用いて、十日菊が些かに萎れると読み解きながら、この発句を解説している。しかし、題「十日菊」を「六日の菖蒲・十日の菊」として把握して、果たして題「十日菊」の説明になるのであろうか。芭蕉の発句の後に、諸家の発句及び素堂の詞書が続いている。そこで、亭主・素堂の「十日菊」の捉え方を手がかりにして、題「十日菊」の意味をうかがうこととする。

先行研究によると、亭主の素堂は

新治筑波を過ぎて幾代か寝つる
日本武尊

かがなべて夜には九夜日には十日を

秉燭者

〔古事記〕中巻

という最初の連歌を踏まえた上で、「さか折のにるはりの菊とうたハばや」(傍線部⑥)という一句を詠み、次いで文(傍線部⑦)

以後全文)を記したという。傍線部⑥と⑦を参照すると、素堂は九日の夜から十日の朝まで続いた重陽の宴会に対して、酒折神社の新治筑波の菊を歌いたいという背景は、以前連歌師にも伝えてきた「筑波の道」という連歌の濫觴を想起していることによつたと分かる。傍線部⑦の後、老後の儂さを感じ、昔に経験したことを偲ぶと詠んだ連歌を、素堂は追想するたびに哀れを感じると表述した。今回の俳諧興行によつて全て思い浮かぶようになったことによつて(傍線部⑧)、と素堂は続いて書き記している。離れまいと懸想しつつ、十日菊を枕もとに置いて眠りにつくことだ(傍線部⑨)という一句を素堂は詠み上げ、この俳諧興行を締めくくっている。

つまり、素堂は「十日菊」を題としたこの宴会に、昔の連歌や連歌師のことが追懐するようになった。そして、素堂はこれらのことを思い出されると、やはり離れがたく別れを惜しむため、十日菊を枕元に置いて就寝した、という心情を表明している。この素堂の表現を吟味すると、「十日菊」とは思い出を包容して惜別の意を象徴する花である、ということが言外に滲み出しているため、先行研究が指摘した「六日の菖蒲・十日の菊」という喩えのみでは、解釈しきれないことが分かる。

したがって、先行研究を検討すると、芭蕉の詞書は主に杜甫の「九日藍田崔氏莊」詩を踏まえた上でなされている、ということでは確かめられる。しかし、題の「十日菊」を詩題として捉える可能性は具体的に提示されていないため、芭蕉の発句と詞書との関係が、十分に検討されているとは言えない。なおかつ、従来の研究は諸家の発句を考慮に入れた上で題「十日菊」を解説していな

いため、「十日菊」を「六日の菖蒲・十日の菊」によって把握することに止まっている解釈は、まだ一考する余地があると思われる。

三 其角の芭蕉発句・鄭谷漢詩受容

(一) 其角の表現した「十日菊」及び芭蕉の『花摘』に対する評価について

前節において検討したように、亭主の素堂の俳諧を吟味すると、題「十日菊」は名残の情が含意されていることに気付く。しかし、素堂が座元として最後の俳諧を書き綴るため、惜別の意を表すことは当然のことであり、素堂の俳諧のみでは題「十日菊」の意味を推定することはまだ不十分であるといえる。注目すべきことは、この宴会の後、当座にいた其角が『花摘』を編集する際に、芭蕉の発句と鄭谷（袁州宜春〈江西省宜春市〉の人）の「十日菊」詩とを対照して引用したということである。その時の一座の参加者である其角は、如何に「十日菊」を認識し、または如何に芭蕉の発句を理解したのか。その『花摘』における記述は「十日菊」の意味を説明するもう一つの証左となると考える。ただし、『花摘』の本文に入る前に、其角が素堂亭においてどのような発句を詠み、次いでどのように「十日菊」を表現したのかを検討する必要がある。そして、芭蕉自身は『花摘』に対して、如何なる評価を与えたのかについても追究しなければならない。

まず、其角が素堂亭で詠んだ発句を振り返ってみると、前節において取り上げた俳諧興行の本文にあるように、其角が詠んだ

は「此客を十日の菊の亭主あり」という一句であった。其角の詠んだこの一句は、赤羽学氏の「十日菊と十三夜」¹³⁾にて提示された現代語訳を参照すると、「この客を誰かと問うてくれる十日の菊を愛する亭主があることだ」という。すなわち、当時亭主の素堂が十日の菊を愛するということを表現し、其角は亭主の素堂のことも「十日菊」のことも欽慕していることが分かる。

次いで、其角の『花摘』に対する芭蕉の評価を追っていくこととする。其角の『花摘』に関して、芭蕉は「曾良宛の書簡」(二元禄三(一六九〇)年九月十二日付)において、「其角、花摘出版のよし。是は前々より段々委細に申聞かせ候。定・面明白かるべくと待かね候」と述べている。このことから芭蕉が『花摘』の刊行を承知していることが窺い知れる。また、「前々より段々委細に申聞かせ候」とあるように、『花摘』の出版前から、其角は芭蕉に出版の仔細について話している。換言すると、芭蕉は『花摘』の刊行を期待していたといえ、其角の書いた『花摘』は、芭蕉の発句を解釈する際、参照されるべき資料であり、同書によって芭蕉の一面をうかがうことが可能であると推察される。

(二) 其角の『花摘』と鄭谷の漢詩について

さて、其角が『花摘』において芭蕉の発句に言及した具体的な内容は次の通りである。

- ⑩ 昼顔の憎き様なる旅の日数ぞいとくるし。⑪ 別後を問ば、
⑫ 「いまだ必しも秋香一夜におとろへず」と、我翁の⑬ 「いづれか今朝に残る菊」とにあらん。かばかりならず、⑭ 忘れがたき事のみぞ多かる。

この詞書の後、其角・肅山・彫棠の三人が興行した歌仙が次のように書き記されている。(以下、括弧「」で補った俳諧用語は黄による。)

筆をさす御笠やかろき下涼

其角〔発句〕

蟬にまかす声のふしし

肅山〔脇〕

いたく酔ほど只顔に月を見て

彫棠〔第三〕(後略)

其角の詞書を解説する前に、この詞書が書き上げられた場面・状況を明らかにする必要がある。歌仙を見てみると、まず詞書の後に其角の〔発句〕が置かれ、肅山の〔脇〕が続いている。蕉門の俳論書『三冊子』(安永五(一七七六)年刊)に拠ると、発句は客が詠み、脇は亭主が詠むという俳諧歌仙の規則があり、芭蕉もそのことを承知していたという。そこで、『三冊子』の説明によつてこの一座の関係を検討すると、其角は客の立場で挨拶する発句を詠み、肅山は亭主として脇を引き継いで、其角の発句に応答したといえる。ところで、其角の「筆をさす御笠やかろき下涼」という発句は、『花摘』以外に、自撰句集『五元集』²¹にも収録されており、ここでは「饒久松肅山」という題が付されている。その題が示すように、其角の発句が旅立つ肅山にはなむけをするために送ったものであり、この歌仙は肅山が旅に出る前に興行された俳諧であつた、ということが分かる。

以上を踏まえた上で、其角の詞書を読解すると、冒頭における「昼顔」(傍線部⑩)とは一体いかなるものなのだろうか。『近世前期歳時記十三種本文集成並びに総合索引』²²を参照しても、「昼顔」は夏の項目に立項されるのみであり、特に説明が行われていない。また、俳諧において「昼顔」の用例を調べても、元禄

三(一六九〇)年以前に「昼顔」を用いて詠んだ俳諧は少ない。

ところが、そのような中で芭蕉は天和年間(一六八一—一六八四)に「昼顔剛勇」という句題によつて、「雪の中は昼顔がかれぬ日影哉」(真蹟懷紙)と詠んだ発句が見出せる。この発句の「昼顔」に対して、先行研究は次のように解説している。²³

朝顔・夕顔と違い、伝統文学に詠まれることのなかつた俳諧的な素材。庶民の生活感覚の中では、やっかいなまでに強い生命力を持った雑草。

つまり、昼顔とは特に俳諧でのみ用いられる題材であり、生き抜く力の強い性質を持つ雑草であると解される花である。そこで先行研究で説かれた昼顔の性質を踏まえて、其角の詞書に立ち返つてみる。すると、「昼顔の憎き様なる旅の日数ぞいとくるし」とは、猛暑でもなお剛勇に咲いている昼顔が憎らしく思える程、この旅の期間が酷暑で非常に苦痛だということを述べていることが分かる。

次に、「別後を問ば」(傍線部⑪)についてである。前述したとおり、この詞書は肅山が旅立つ前に記したものである。そのため、「問ば」は「別れた後を問い訊ねられたのならば」と訳してよからう。其角はこの直後に詩句「いまだ必しも秋香一夜におとろへず」(傍線部⑫)、及び芭蕉の発句の一部「いづれか今朝に残る菊」(傍線部⑬)を引用した。其角が『花摘』において引用した鄭谷の「十日菊」詩について、従来の注釈書は『円機活法』を出典として指摘している。ただし、当時流布していた漢籍を調べると、鄭谷の「十日菊」詩は『円機活法』以外にも、『冷齋夜話』・『詩人玉屑』・『三体詩』・『聯珠詩格』に収録されている。そのた

め、これらの書籍を芭蕉・其角が参照していた可能性は大いにある。しかし、其角が取り入れた鄭谷の漢詩は、結句「いまだ必しも秋香一夜におとろへず」のみであった。各漢籍を検討した結果、『聯珠詩格』所収の鄭谷の「十日菊」詩に、他の漢籍と本文の異同があるけれども、結句のみは異なるのである。⁽²⁶⁾ 結局のところ、どの漢籍に拠ったとしても、其角の詞書における意味に、大きな変わりはないのである。そこで、本稿では其角が踏まえた蓋然性が高い『円機活法』によって、其角の引用した鄭谷「十日菊」詩の解釈を進めたい。

『円機活法』では、鄭谷の詩が卷二十の「百花門」における「十日菊」に取り上げられている。その「十日菊」という親項目の次には、「叙事」、「事実」、「品題」などの子項目が順に並べられており、鄭谷の漢詩は「蜂愁」という「事実」(事例のこと)に取められている。その内容は次の通りである。(以下、太字、文字圏は黄による。)

十日菊

「事実」残芳薛瑩詩ヲ(黄注、薛瑩の漢詩を略す)蜂愁鄭谷

詩節去リ蜂愁アトモ蝶不レ知。曉庭シ還リ繞ル折リ残ス枝ニ。自ラ縁ニ今日人心ナリ別ニ。未ニ必シ秋香一夜ニ衰ヘ。

右記の通り、鄭谷の「十日菊」詩の全文が取められている。次に引用するのは村上哲見氏の訳文である。⁽²⁸⁾

節句が過ぎてしまったのを蜂は愁えているが、蝶は気がつかないで、あけ方の庭に昨日折りしだかれた菊の枝をなおも飛びめぐっている。(菊の色香が昨日と変わって見えるのは)今日人の心が変わってしまったからなのであって、花自身の

秋の香が一夜にして衰えてしまったわけではあるまい。

右文を換言すると、鄭谷は重陽の節句が終わって愁える蜂と、その愁いや節句の終わったことを知らない蝶とを見た。残された枝を見て歩くと、十日になっても残菊の香りは決して衰えるというわけではない。菊の花が変わったように見えたのは、人の心が変わったからである。この詩にはこのような鄭谷の愁いが表現されている。

(三) 其角が捉えた「十日菊」の様相

これまで述べてきたように、其角が踏まえたのは鄭谷の漢詩のうち、結句の「いまだ必しも秋香一夜におとろへず」のみであった。よって、其角が捉えた鄭谷の「十日菊」詩は断章取義によって読み取ったものであり、翌日になったとしてもその香りが衰えないという性質を持つ花として把握されていることが留意される。そのような意味として、芭蕉の発句と関連付けた上で、忘れがたいことだけは多いものだな(傍線部⑭)という一文を綴っている。したがって、以上を踏まえて其角の詞書を探究すると、次のように解釈できる。

猛暑にもかかわらず滾るように咲く昼顔が憎らしいと思える程、旅の期間が酷暑で甚だに難儀だ。(我々が)別れた後のことを訊ねられたのならば、鄭谷が「十日菊」詩で歌ったように、「重陽の節句が終わり、十日になったとしても菊の香が決して落ちるといわけではない」と答えるだろう。あるいは、芭蕉が発句で詠んだように、「重陽の節句の終わり、翌朝になって残ったのは、十日の菊かどちらなのか。それは

鄭谷の漢詩と相通じるように、翌日に残ったのは重陽の節句が終わりでも衰えない十日菊か」といったような心情である。これほどではなくとも、忘れがたい事ばかり多くあるものだよ。

このように、鄭谷の詩意を明らかにすることによって、其角の解した「十日菊」及び芭蕉の発句の意味も読み取ることができずなわち、鄭谷の漢詩は十日になったとしても菊の香りが変わらなないことを示した。そして、中秋の翌日における十六夜の月に対比して、重陽の節句の翌日に残った十日菊を芭蕉は愛でた。其角は芭蕉の発句を鄭谷の漢詩と関連させて捉え、「いづれか今朝に残る菊」のみ踏まえたため、翌日に残った十日菊のほうを詠味するということに受容したのであろう。このような観点からは当時、素堂亭の俳諧興行において、其角が詠んだ一句「此客を十日の菊の亭主あり」に立ち戻り考え合わせると、其角は素堂亭の宴会においても「花摘」においても、「十日菊」のほうを称揚しているため、その姿勢が始終一貫していることが分かる。

それに限らず、この詞書における前後の文脈から明らかなように、其角が別れた後も忘れがたい思い出が多いということから、「十日菊」に思い出を織り込み、別れを惜しむという意味を包含していると推察される。この点に関しては、素堂が素堂亭の俳諧興行において最後に記した俳諧の意味とも符合しているため、其角が理解した「十日菊」は、有意義のものであると考えられる。さらに「花摘」におけるこの記述は、旅に出る肅山を饒別するために興行したものであることから、其角は鄭谷の漢詩と芭蕉の発句を踏まえることによって、肅山の旅の健闘を祈ったのであろう

と推測できる。

したがって、其角が「十日菊」のほうに比重をかけたことばかりでなく、鄭谷の漢詩と芭蕉の発句を含めて全文を読み返すと、「十日菊」とはなおいっそう次のようなことを意味する花であるとまとめることができる。

A. 翌日になったとしてもその香りが衰えない花。

B. 翌日になったとしても衰えないように、旅の健勝を祈る意味が内包される花。

C. 忘れがたいことが多いと綴ったように、思い出を盛り込んでも惜別の意を表す花。

このような其角の知見を通して芭蕉の発句がどのように読み直せるか、次節で検討したい。

四 其角の理解を通して読む芭蕉の発句

前節において、其角の『花摘』の記述から、芭蕉の発句は鄭谷の「十日菊」詩の結句「いまだ必しも秋香一夜におとろへず」と趣意が通じている可能性が高いと示した。もともと第二節において検討したとおり、芭蕉が『和漢朗詠集』所収の元稹「十日菊」詩を踏まえた可能性も否定できない。しかし、『花摘』の詞書によって、其角が鄭谷の漢詩を認識していることが確かめられる。また、その『花摘』の記述からみると、貞享五（一六八八）年に、其角はその一座の連衆として「此客を十日の菊の亭主あり」を詠んで、素堂を「十日菊」の亭主として欽慕し、その十日菊の趣意が鄭谷の漢詩を基にしたものであろうと推量している。そして、その一座の連衆が題「十日菊」を共有した上で俳諧を詠んでいく

わけであるから、其角の記述を参考にすると、「十日菊」という題も鄭谷の詩題に基くという可能性が高いともいえよう。

ところで、芭蕉の発句は「いざよひのいづれか今朝に残る菊」と詠まれたように、十日菊は十六夜の月と比べて、どちらのほうが趣意深いであろうかと問いかけている。もし其角の解釈したように、「十日菊」のほうが十六夜の月より勝っているのであれば、十六夜の月ほどのように評価すればよいのだろうか。幸いにして、芭蕉が「十六夜」を以て詠んだ句は、この発句以外にも次のような三句がある。それを検証することによって、芭蕉が表現した「十六夜」を把握することができると思われる。

(I) 「いざよひもまださらしなの郡哉」(貞享五(一六八八)年吟、『更級紀行』収録)。

(II) 「十六夜や海老煎る程宵の闇」(元禄四(一六九一)年吟、『笈日記』収録)。

(III) 「十六夜はわづかに闇の初哉」(元禄六(一六九三)年吟、『続猿蓑』収録)。

右のように、まず、発句(I)は十六夜の月が「未だ更級」を「未だ去らじ」という表現にかけることによって、その離れがたい余情を示している。そして、発句(II)は、十六夜の月が出るまでのその僅かな間に、主人が客人のために酒の肴の海老を煎る様子を描き出し、十六夜の月を見る宴会を想像した一句である。最後の発句(III)は、十六夜の月は昨日の名月と比べると、僅かに欠けているように十六夜とは闇の初めだと感嘆している。

以上の用例からみると、芭蕉にとって十六夜の月は名残を惜しむことを示すものであり、十五夜の祝事の続きでもあると推察さ

れる。よって、十六夜は十日菊と類似している要素があり、より劣るとは決して考えられない。しかし、十六夜の月そのものの様態から分かるように、十五日の名月より欠けているため、哀れや余韻のあるものとして認識されている。それに対して、十日菊は翌日になってもその香りが衰えることないため、重陽の宴会を閉じがたく、惜別の意として転用されている。したがって、重陽の翌日にまた続く宴会は、まるで中秋の名残の十六夜ようであるけれども、十日菊は十六夜の月と違って、翌日でも萎れずに依然として香りがよく咲いているため、重陽の興を冷めさせることがない。このことから、十日菊が十六夜の月より捨てがたく、名残惜しい趣があるといっても、過言ではないと思われる。

その上、芭蕉の発句を解釈するにあたって、先行研究は芭蕉の発句が詞書中の「明年誰かすこやかならん事を」と密接な関係があると指摘している。このことから、芭蕉の発句において表現しようとすることは、単なる十六夜の月と十日菊を比較することに限らず、さらにその詞書に対する応答がこの発句を通して表現されていると考えるべきである。ここで、改めて其角の理解を反映させ、鄭谷の「十日菊」を取り入れて検討すると、芭蕉の発句は次のように読み取れる。

【詞書】 来年、この日、この一座の中で誰が元気で無事に暮らしているのだろうか。

【発句】 中秋の節句の翌朝に残ったのは、十六夜の月なのか。重陽の節句の翌朝に残ったのは十日の菊なのか。翌日に残った十日菊の香りは決して衰えるまいと鄭谷の漢詩も歌ったように、十日菊の趣は欠け初める十六夜の

月より勝っているのではないか。また、翌日になったとしても十日菊が決して盛りを過ぎないがため、重陽の宴会を締めがたくなっている。まあ、たとえ散会したとしても、きつと忘れたい思い出が多くあり、みんなは「十日菊」のように翌年でも歳衰せず、元気に再会するのであろう。

このように、其角の理解に基づいて考えてみると、「十日菊」は惜別の意を表すだけではない。さらに翌日になっても衰えないという「十日菊」の含意を通して、来年も健在することを祈る、という祝福の意が包含されるものとして会得される。そのような趣はまさに芭蕉の詞書「明年誰かすこやかならん事を」に応答するものとなり、其角の理解に基づいて解釈すると、詞書と発句が一体となつて、お互いに照応するように響き合っている。よつて、「十六夜の月」という風情はそれはそれで趣が深いのであるが、「十日菊」は別れた後でも思い出が多く心に留まり、お互いの健勝を祈る言外の意が内包しているため、より佳賞すべきといえよう。

五 おわりに

これまで考察してきたように、素堂亭で興行された俳諧に、芭蕉は杜甫の漢詩を踏まえた上で詞書を記した。よつて、俳諧の題「十日菊」についても、漢詩の詩題に拠った可能性が予想される。そして当時、素堂亭の連衆の一人である其角は、『花摘』において鄭谷の漢詩と芭蕉の発句を、肅山を饒別する時の俳諧に用い、別れた後でも忘れたい思い出が多く胸に刻む、という文脈に

よつて引用した。そこで、其角が捉えた「十日菊」の意味を通して芭蕉の発句を吟味すると、別れた後になお、お互いのことを心に刻み、来年になつたとしても元気に再会できるのであろう、といった含意をさらに汲み取れるようになる。このような意味は、まさに芭蕉の詞書「明年誰かすこやかならん事を」という問いかけに対する応答にはなる。それゆえ、其角の表現した「十日菊」によつて、改めて芭蕉の発句に示唆された惜別と祝福の意が見出せるようになってきている。このように、本稿では其角の記述にしたがつて鄭谷の漢詩を踏まえ、題「十日菊」の捉え方を解き明かした。そして「十日菊」によつて、一座の健康を祈る祝福の意が自然に答えとして含意されることを指摘し、芭蕉の発句に対する新たな解釈を試みた。以上、蕉門の受容を検討するという方法を通して、新しい読み方を見出すという芭蕉の俳諧について、今後もいつそう追究していきたい。

注

- (1) 『華つみ』とも表記する。本文は『華つみ』(二六九〇)年刊) 東京大学総合図書館・竹冷文庫蔵本(マイクロフィルム)を参照した。なお、資料の引用に際して、現在通行の字体を用い、適宜句読点を補った。そして、丁移り、改行は示さず、読み下し文、清濁、記号、括弧、傍線は黄による。また、漢詩における合字は開き、漢文訓読の返り点のうち、欠落していると考えられるものは括弧()を付して補った。以下同。

- (2) 例えば、仁枝忠『芭蕉に影響した漢詩文』(教育センター出版、一九七二年)や、中村俊定『芭蕉事典』(春秋社、一九七八年)な

どは、鄭谷の「十日菊」の影響を受けた芭蕉の発句を列挙した。今回取り上げたこの発句は、鄭谷の「十日菊」の影響を受けた中の一句である。

(3) 岩田九郎『諸注評釈芭蕉俳句大成』(明治書院、一九六六年)。

(4) 本文は東京大学総合図書館・酒竹文庫蔵本(マイクロフィルム)に拠った。芭蕉のこの発句は、『笈日記』以外に、桃隣編『陸奥衝』(元禄十(一六九七)年跋)と風国編『泊船集』(元禄十一(一六九八)年刊)にも収録されている。

(5) 本文は元和九(一六三三)年刊本により、本文は尾形仿編『近世前期歳時記十三種本文集成並びに総合索引』(勉誠社、一九八一年)を参照した。

(6) 前掲注(5)『近世前期歳時記十三種本文集成並びに総合索引』参照。

(7) 芭蕉以前の俳諧における「十日菊」・「残菊」に関する用例は、例えば以下のようなものがある。

・「残る菊は万歳衆の翁かな」『崑山集』(慶安四(一六五二)年刊)

・「残菊のうつるは取も返されじ」『俳諧塵塚』(寛文十二(一六七二)年刊)

・「久しく残る菊の酒部屋」『大坂桜千句』(延宝六(一六七八)年刊)

・「十日の菊は少霜いたみ」『時勢粧』(寛文十二(一六七二)年跋)

なお、集英社『日本古典俳文学大系』以外に、貞門の一派である山本西武の『沙金袋』(延宝四(一六七六)年奥)において、「十日菊」を類題とされた俳諧が見出せる。しかし、その俳書は山本西武一派に偏っているため、一般に流布されていないと推量されている。このことから、芭蕉がそれを参照した上で、「十日菊」を類題にしたと想像しがたい。以上、「沙金袋」の本文と解題につ

いて、森川昭氏解説『近世文学資料類従 古俳諧編(22)』(勉誠舎、一九七四年)を参照した。

(8) 元龜二(一五七二)年承和二(一六五三)年成。本文は慶安四(一六五二)年初刊本により、前掲注(5)『近世前期歳時記十三種本文集成並びに総合索引』参照。

(9) 本文は久保田淳・馬場あき子共編『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店、一九九九年)に拠った。以下、該当箇所を引用し、傍線は黄によった。

残菊―【さんぎく】―重陽の節句、陰曆の九月九日を過ぎても咲き残っている菊。また、晩秋から初冬にかけて咲いている菊。歌語としては「残れる菊」「残りの菊」などと表現されることが多い。(中略)歌題としては、「内裏歌合永承四年」「六百番歌合」などに見える。早く『菅家文章』巻一に「残菊詩」があり、詩題にもとづく歌題かもしれない。「内裏歌合永承四年」は一月九日の催しなので、初冬の景物として出題したと見られる。「六百番歌合」でも冬の題の一とされる。

(10) 本文は弥吉菅一・赤羽学・西村真砂子・壇上正孝合著『諸本対照芭蕉俳句文集』(清水弘文堂、一九九七年)を参照した。

(11) 本文は『杜律集解』(天和三(一六八三)年刊)〔長澤規矩也『和刻本漢詩集成 第二輯』汲古書院、一九七五年〕に拠った。

(12) 本文は東京大学総合図書館・酒竹文庫蔵本(マイクロフィルム)に拠った。

(13) 北村季吟『和漢朗詠集注』(寛文十(一六七〇)年刊(和刻本))。本文は関西大学総合図書館蔵本に拠った。

(14) 芭蕉の「菊の後大根の外更になし」という発句は、大島蓼太著『芭蕉句解』(宝曆九(一七五九)年刊)を初め、元積の「十日菊」を踏まえて詠んだと指摘されている。

(15) 小学館、一九九五年。

(16) 素堂の俳諧における典拠・解釈は、赤羽学氏の『芭蕉講座』第五卷(有精堂、一九八五年)・木藤才藏編『連歌新式古注集』(古典文庫、一九八八年)を参照した。また、『古事記』の引用文は『古事記祝辞』(岩波書店、一九五八年)に拠った。なお、素堂の引用したこの古歌の最後は「日は十日」という五音のみであり、原文の「日には十日を」と異なっているが、『連歌新式』「心前注」(天正十四(一五八六)年成)で記した古歌と一致している。よって素堂は『古事記』のみならず、特に連歌書も目にしたと推測できる。

(17) 本文は前掲注(1)『華つみ』参照。

(18) 前掲注(16)『芭蕉講座』第五巻に収録されている。

(19) 今栄蔵『芭蕉書簡大成』(角川書店、二〇〇五年)。

(20) 服部土芳著。本文は『古典俳文学大系10』(集英社、一九七〇年)により、以下該当箇所を引用する。
脇は亭主のなす事、むかしより云ふ。しかれども首尾にもよるべし。客ほ句として、むかしは必ず客より挨拶第一にほ句をなす。脇も答るごとくにうけて挨拶を付侍る也。師のいわく「脇、亭主の句を云る所、即、挨拶也。」

(21) 本文は今泉準一『五元集の研究』「夏の部」(桜楓社、一九八一年)を参照した。

(22) 前掲注(5)『近世前期歳時記十三種本文集成並びに総合索引』参照。

(23) 芭蕉の発句及び昼顔の解釈は『松尾芭蕉集①全発句』(小学館、一九九五年)を参照した。

(24) 其角が踏まえた漢詩の典拠について、野村二三『其角連句全注 釈』「花摘集」(笠間書院、一九七六年)、及び前掲注(21)『五元

集の研究』を参照した。

(25) 以上の漢籍について、『冷齋夜話』は寛文六(一六六六)年刊(和刻本)であり、大阪府立中之島図書館蔵本に拠った。『詩人玉屑』寛永十六(一六三九)年刊(和刻本)であり、長澤規矩也編『和刻本漢籍隨筆集第十七輯』(汲古書院、一九七八年)に拠った。『三体詩』は天和四(一六八四)年刊(和刻本)であり、大阪府立中之島図書館蔵本に拠った。『聯珠詩格』は無刊記(和刻本)であり、大阪府立図書館中之島蔵本に拠った。

(26) 『聯珠詩格』は他の漢籍と違って漢字や訓読の異同を、傍線によって次のように示すこととする。なお、本文は前掲注(25)『聯珠詩格』に拠った。
節去、蜂愁蝶也知。曉庭和露折殘枝。
祇縁今日人心別。未必秋香一夜衰。

(27) 『円機活法』延宝元(一六七三)年刊(和刻本)。本文は大阪府立中之島図書館蔵本に拠った。

(28) 『三体詩』(朝日新聞社、一九六六年)。

(29) 本文解釈は前掲注(23)『松尾芭蕉集①全発句』を参照した。

〔付記〕 本稿は、第二十二回神戸大学文学部国語国文学会研究部会(平成二十二年八月二十一日於神戸大学)の口頭発表、原題「芭蕉発句と『聯珠詩格』——「いさよひのいつれか今朝に残る菊」における「余韻」に基づいたものです。席上で堀信夫先生、木越俊介先生、浜田泰彦先輩をはじめ、諸先生、諸先輩方からご教示を賜りました。ここに記して深謝申し上げます。また、貴重な資料の閲覧、引用を許可してくださった関係諸機関の方々にあつく御礼申し上げます。
(ふあんちゃんやふえい／神戸大学大学院生)